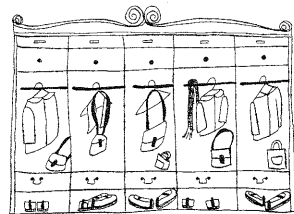


子どもが“お片づけ”する姿から

斉藤智美



私は「保育における“お片づけ”」というテーマで卒業論文研究をしました。子どもたちの“お片づけ”する姿を通して私が感じたこと、考えたことをこの場をお借りして少しお話しさせていただきますと思います。

子どもの“お片づけ”に注目する

私が“お片づけ”に興味をもったきっかけは、一人の男の子の幼稚園の生活をサポートするボランティアでのことです。その男の子は“お片づけ”の

時間になると、それまでやっていたことを放り投げ、「いや！ お片づけはしない！」と全力で抵抗を示す人で、そばにいた私は、なぜ彼がこんなにも“お片づけ”を拒否するのだろうか？ と考え、そのうちに自分の中で“お片づけ”というものが浮き上がってくるようになりました。

保育の場においては、主だった活動の終わりには必ず“お片づけ”があります。子どもは園生活の中で“お片づけ”と呼ばれる行為を何度も繰り返し行っていることとなります。しかしながら、“お片

づけ”が一つの活動として注目されることは少ないようです。取り上げられることがあっても、多くは子どもが身につけるべき生活習慣の一つ、という文脈の中でのことです。“お片づけ”が生活習慣であるとするならば、片づけられない生活習慣として身につけていけない、ということになります。私が出合った事例の中に、こんな女の子の姿があります。

M子は自由な遊びの時間に、ほかの子どもとかかわりながら遊ぶということをあまりしない人でした。おままごとをするスペースから、一人で周りの子どもの遊ぶ姿をじっと見ていることが多く、どう見ても遊びが充実している、という感じではありませんでした。

しかし、M子はお片づけの時間になると、遊びの時間の様子からは想像できないくらいテキパキと自分の遊びに使っていたものももちろん、遊んでいないものまで片づけたのでした。そのM子も、次第

に友達とかかわり合いながら楽しそうに遊ぶ姿が見られるようになります。そうすると、彼女は以前のようにお片づけの時間に片づけをしなくなってしまうのです。

M子はむしろ張り切るようにしていた“お片づけ”を、遊びの様子の変化とともに、しなくなります。私は、この彼女の姿から“お片づけ”が、子どもが身につける生活習慣、といった観点のみではとらえることのできないことであり、また、子どもがものを元の場所にきちんと戻すか否か、というように“お片づけ”だけを切り取って考えるものではないのではないかと考えるようになりました。

子どもにとつての“お片づけ”は、それまでの遊びとは切っても切り離せないものなのではないでしょうか。私は、その遊びに対する子どもの思いが、“お片づけ”に対する姿勢に影響するものなのではないかと思うのです。

H男の“お片づけ”

卒業研究のための観察の中で出会ったH男は、自由な遊びの時間では、一つの遊びや場所にずっと留まってはならず、どちらかというところ、いろいろな遊びにちよつとずつ顔と口を出していくという姿が多く見られる人でした。そしてお片づけの時間になると、いつの間にかそれまでいた場所からいなくなつてしまいます。担任の先生に見つけ出されて自分が使っていたものを片づけるように言われると、渋々、何となく片づけをする、といった様子で、先生方からは、「“お片づけ”をしない人」と認識されてきました。

しかし、B子・I子という二人の女の子とH男がおままごとなどでよく遊ぶようになってから、H男の“お片づけ”に変化が見られるようになります。

ある日、H男・B子・I子の三人は粘土で遊んで

いました。そして、H男が「あ、あれやろーっと！」と言いながら、猫耳としっぽを取り出して、自分の身につけだすことから“おうちごっこ”が始まります。三人は、畳やついたて、キッチン台などをいつも置いてある場所からどンドン移動させ、自分たちの遊ぶスペースをつくっていきました。自分たちは、H男が「押せー！」「じゃあ、そっちから押して！」などと言い、また「じゃあ、女同士がネコで、男は人間ってことでどう？」などの提案もしており、この遊びを彼が非常に積極的に楽しもうとする様子がうかがえます。

“おうちごっこ”は、“おうち”の中で子どもたちが子猫に扮して、人間役の人にお散歩に連れていかけてもらったり、ご飯を作ってもらって食べたりすることを楽しむごっこ遊びです。担任の先生の「なんだか昨日のおうちごっこの続きみたいね」という言

葉に、H男が「うん！ おうちごっこ第二弾！」と答えることから、この前日ぐらゐから生まれてきた遊びのようです。H男は、「おうちごっこ第一弾」がとても楽しかったのです。だから、H男の「あれやろ〜と！」という言葉と、積極的に準備を進める姿があつたのだと思います。H男たちの楽しそうな様子に引かれて、ほかの数人の子どもたちも参加し、「おうちごっこ」は大盛り上がりでした。そのうちに「お片づけの時間」になり、担任の先生が少し言いづらそうな様子で、「おうちごっこのみなさん、もうお片づけの時間なの〜」とH男たちに言います。H男が「ええ!?」と大きな声でびつくりした表情をしながら言うので、先生が「そんなに困っちゃった？ でもお弁当の後でもできるから」と言うと、H男は「うん！ そうだね！」と返します。そして「ここ、いっぱいおもちゃ出てるんだよねー。大丈夫かなー。先生お手伝わなきゃいけない

んだけどー」と言う先生に対して、H男は「大丈夫！ 全部H男がやる！」と宣言し、テキパキと出ているものを元の場所に片づけだします。H男と、そこにいた子どもたちによつて「おうちごっこ」で出されていたものはどんどんと片づいていきます。あらかたものが片づいた時に、様子を見に来た先生が「すごいねー。きょうはお部屋が早く片づいちゃった」と言うと、H男はちよつと得意げな、満面の笑みになるのです。

この日の「お片づけの時間」のH男の姿は、「お片づけ“しない人”として認識されていたH男とは大きく異なるものです。何が彼を「お片づけ」に対して積極的にさせたのでしょうか。

“お片づけ”と遊びの関係性

“お片づけ”には、多くの場合、元あつた場所から出してきたものがあることが前提となります。H男

の事例を考えていると、どういった経緯でそのものを元あった場所から出してきたか、ということが子どもの「お片づけ」に対する気持ちに影響することもあるのではないかと思えてきます。H男たちの「おうちごっこ」には「ものを出してくる楽しさ」「ものを扱う楽しさ」があつたと考えられます。

たとえば、「昨日みたいなおうちにしよう」と昨日楽しんだことを思い出しながらキッチン台などを出していく期待感や、出されたお皿の料理を前にして、「なんか出てきた！これはなんの料理かしら」とワクワクする経験などです。これらの「ものを出してくる楽しさ」や「ものを扱う楽しさ」を感じながら充分に遊び込めたからこそ、H男はお片づけの時間になって、「お片づけしよう！」という気持ちになつたのではないのでしょうか。自分たちが楽しみながら出してきたものというのは、子どもを「お片づけ」に対して積極的にすることもあるので

はないかと思えます。つまり、そのものを使いながら遊び込めたか、ということが、子どもの「お片づけ」に対する思いに影響するとも言えるでしょう。

子どもの「お片づけ」する姿を通して私が感じたのは、子どもの「お片づけ」活動は、その子どものもので遊びのあり方にも左右されるのではないか、ということでした。子どもが「お片づけ」をしなくてはならなくなつた時、今までやっていた遊びに対して「遊んだ！」と感じているのか、それとも「もつと遊びたい！」と感じているのか。それだけで子どもの「お片づけ」する姿が変わってくることもあるでしょう。「お片づけ」をするには、今まで行つてきた活動をやめなくてはなりません。子どもにとつて「お片づけ」とは、ただものを片づけることなのではなく、今までの遊びと、どう決着をつけるかを問われるものなのだと思います。「お片づけ」は、子どもと遊びの別れの場と言えるのではな

いでしょうか。「お片づけ」をすることで、今までの遊びに別れを告げるのです。しかし同時に、ものを元の状態に戻して「お片づけ」することが、子どもと遊びの新たな出会いへの準備となることも確かです。

「お片づけ」にそれまでの子どもの遊びの姿や思いが表れてくるものであるのなら、大人が子どもの「お片づけ」に対する姿を見ることが、その子どもの遊びや学びの理解へとつながることもあるのではないかと思います。また、子どもの「お片づけ」をどう支えたり促したりするかということが、その子どものそれまでの遊びの締めくくり方に大きくかわってくるでしょう。

「お片づけ」を子どもの行う活動としてとらえるのであれば、「お片づけ」も子どもの自発性や主体性を大切にできるようなものであってほしいと考えます。大人が子どもに生活習慣として身につけさせる

ために「お片づけはしなくてはならないもの」として指導するのではなく、その子どもへの理解を基にしたかわりによって子ども自身が「お片づけしよう」と思い、自発的に「お片づけ」に取り組むことが、結果として子どもの「お片づけできた！」という達成感や充実感につながっていくと考えられます。この達成感や充実感の積み重ねが、子どもの「お片づけ」に対する態度を育てていくこともあるのではないのでしょうか。

子どもの「お片づけ」を、ものを元の場所に戻しているか・戻していないか、生活習慣として身につけているか・身につけていないかといった狭い観点からとらえるだけでなく、それまで行っていた遊びと流れをもつものとして関係づけながら、一つの活動としてとらえる視点をもつことが大切なのではないか、というのが「お片づけ」の研究をして感じたことです。

(お茶の水女子大学)